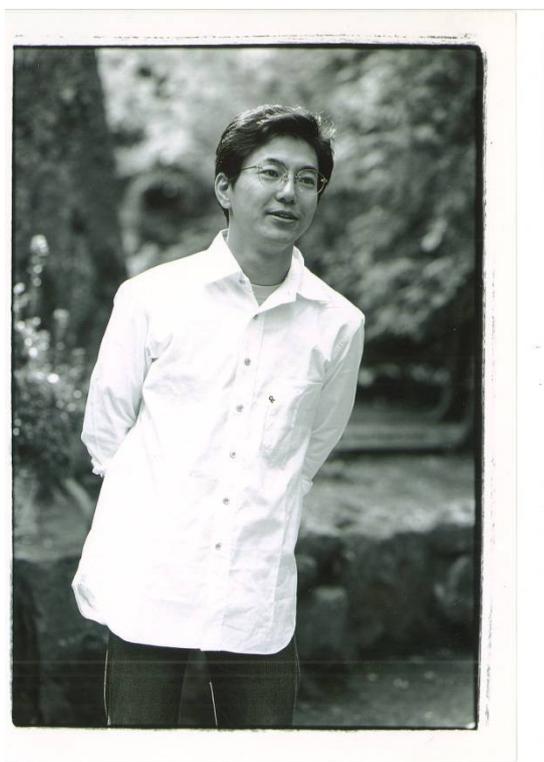


## 講演会報告①

2016年2月27日（土）

府中市立図書館講演会

「作家・山本幸久氏講演 お仕事小説はこうして生まれた！作家のアイデア帳」



平成27年度最後の図書館講演会は、小説家の山本幸久先生をお招きし、作家生活の舞台裏についてお話をいただきました。



今回は、参加者との意見交換が活発にできるようにという目的で、いつもの講義形式ではなく、全員が向かい合う形の会議形式での開催です。



10月、打ち合わせのために中央図書館に先生が来てくださいました。

お約束の時間まで、ルミエール府中1階「ロータス・ガーデン」で、新作『誰がために鐘を鳴らす』を執筆していらしたとのこと。

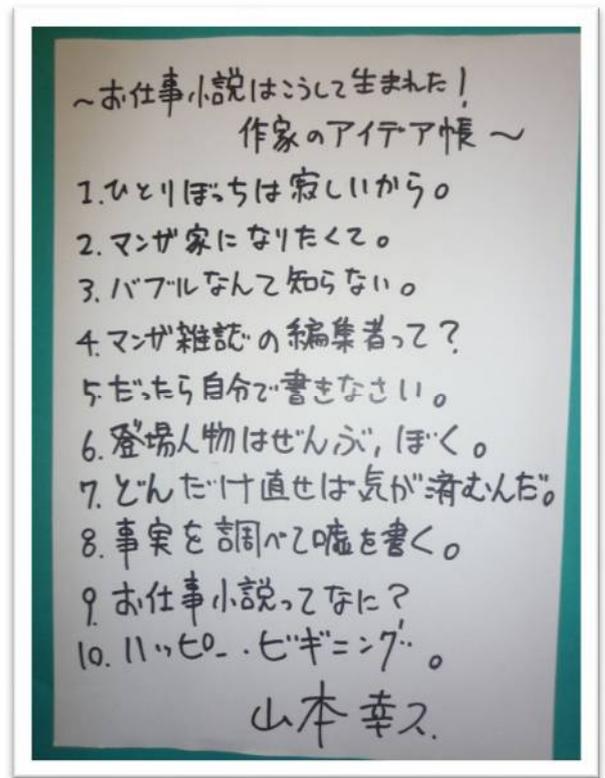
講演会は2部構成で行われました。

前半は、「なぜ作家になったのか」を、先生の幼少時のエピソードなどを織り交ぜつつ、プログラムに沿ってお話してくださいました。



「子どもの頃、とても怖がりだったんです」

ひとりでいなければならない時が怖くて、自分でお話を作って自分に聞かせるということを昔からされていたとのこと。



「お話を書くと、どうやら世の中では“小説”と呼ばれるものになるらしいんです」と山本先生。

先生の子どもの時代の夢は小説家ではなく、漫画家でした。

『少年ジャンプ』を愛読し、ご自身でも漫画にチャレンジされていたそうです。



「小説でよく読んだのは、星新一さん、小松左京さん、筒井康隆さんや、ルパン・シリーズなど、本好きの男の子によくある読書傾向ですね。和田誠さんの描くイラストが大好きで、和田さんが表紙絵を描いている本をよく読んでいました。」

大学を卒業されてから、内装会社の広告部門に就職をされた山本先生。小説を書くきっかけは何だったんでしょうか。

「奥さんに、書いてみたら？と言われてたんです」

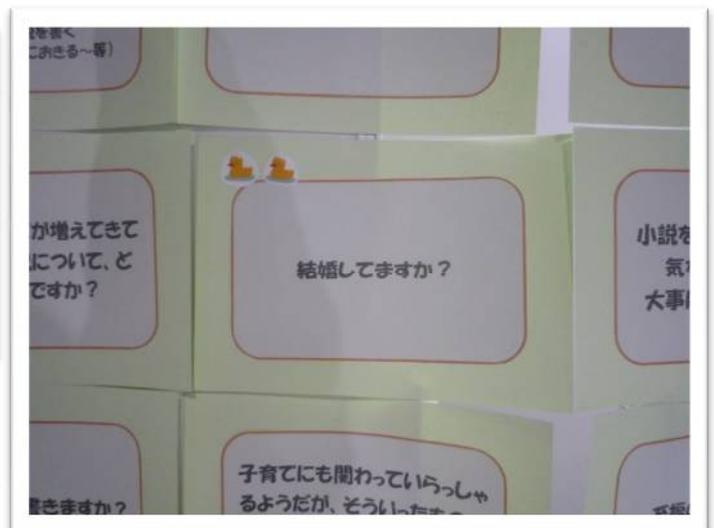
奥さんは小説で、ではなかったようですが、お2人で世田谷文学賞に応募され、その時入賞した作品が、山本先生のデビュー作の原案になりました。

明るく、優しく、ユーモアたっぷりの語り口で、奥様との会話を再現してくださり、和やかな雰囲気でお話は進みます。

先生のお人柄に参加者の方々も魅了されたところで、後半は「作家への質問」タイムです。

事前に読者のみなさんからいただいた質問や、講演会参加者の方々からの質問に、先生が答えてくださいました。

前日までに受付けた質問は会場前のボードに貼り出し、当日の参加者の方々に「わたしもそう思う！」というものにシールを貼っていただきました。



\*質問タイムで先生が答えてくださった内容\*

Q. これまで書いた作品で、一番思い入れのある作品のタイトルと、お気に入りの登場人物は誰？

A. どれも愛着がある。『ある日、アヒルバス』は、書いていて面白かった。『凸凹デイズ』は、娘が生まれる頃に書いた作品。富山の旅館みたいな病院の和室に一週間くらいいて1話目を書いたので、とても思い出深い。デザイン事務所の人を出しやすくて、ちょこちょこ他の作品にも登場する。醐宮などの性格の悪い人は、書いていて面白い。

Q. 山本先生の作品の主人公は年代も性別も様々なのに、どうやってそれぞれの主人公の気持ちになりきって上手く描くことができるのでしょうか。

A. 自分を書いているから。楽譜が読めないので、ハンドベルの話（新刊）は恐る恐る書いた。普段はガラケーで奥さんとかメールしないので、LINEが登場する場面も手探りで書いている。やっぱり年上の人物の方が書きやすい。

Q. 影響を受けた作家やモノや音楽とか、何かありますか？

A. タランティーノ監督の『キル・ビル Vol.1』を観て、「ああ、何か思いついたら、自由に書いてもよかったのか」と思った。日本刀を持って飛行機に乗るとか。音楽はいろいろ聴く。あと最近は聞かないけれど、昔はよく落語を聞いた。

Q. 物語の着想はどんなところから？本を書くとき、アイデアをどうやって探しますか？どこにいる時、一番アイデアが浮かびますか？

A. 『アヒルバス』は、テレビのピタゴラススイッチの体操でバスガイドをやっていたのを見たから。人力車はなんだっけ。バスガイドとか学芸員とか、役職はあっても出世とは関係ない職業の人が面白いと思う。

スタバやドトールで、人の話をよく聞いている。電車で化粧する女の子を、批判という意味ではなくじーっと見て「ここで気合を入れてこれからどこに？」と想像したこともある。いろんなところにネタは転がっている。

Q. アイデアが浮かんで、これだ！と思うときはどういう感覚？どういう気持ちになる？

A. 例えばハンドベルの話を書いた時は、核になるところやラストは何となく浮かんでくる。そこに自然にたどり着くように悩むが、結局は書き始めてみないとわからない。

アイデアはお風呂とかでパッと浮かぶことが多いけれど、突然何もないところから出てきたわけじゃない。パッとひらめくまでに、「うーん」と何時間も考える時間がある。アイデアというのは、思い浮かぶ前にいろいろあって初めて出てくるものだと思う。

Q. ライバル視している作家はいますか？

A. 作家になってから日本の作家のものはあまり読まなくなった。面白くても嫌だし、つまらなくても嫌。でも長嶋有は読む。小林信彦、鈴木道彦は好き。

Q. 先生が好きな作家は？

A. 子ども時代は江戸川乱歩の「少年探偵団」シリーズから入った。明智小五郎が洞窟で怪人二十面相をやっつける絵を描いたら、親に「何でこんなに暗い絵を」と驚かれたことがある。

あとは星新一、小松左京などの日本のSFから海外SF、カート・ヴォネガット、ジョン・アーヴィング、アン・タイラーなど。

Q. 普段、どんなタイムスケジュールで生活されていますか？一日のサイクルを教えてください。

A. 朝7時に起きて、8時頃、子どもが学校へ行くタイミングで外へ出て、昼ごろまでスタバかドトールで小説を書く。家では書かないし、午後は書いてもまとまらない。

今は週3回、父親の介護をしているので、最近の作品には介護の場面が出てくることもある。

Q. 育児パパなどが増えてきている現在の状況について。

A. 自身についていえば、育児についてはよくやっていると思う。オムツをかえたり、絵本を読んだり、とても面白い。こんなに面白いんだから、みんなもやればいいのにと思っている。

Q. 作家のお給料はいくらですか？ドラマになったりするといくらもらえたりしますか？

A. すごく高くも、少なすぎでもない。一枚〇円です。食べていけるだけ、いただいています。ドラマ化の場合、思ったよりも少ないかも？

Q. 先生は小説の中で「ばか」という言葉を「莫迦」と書かれていますが、「馬鹿」や「バカ」とは違う意味合いや、言葉選びのこだわりがあるようでしたらお聞きしたいです。

A. ひらがなだと分りづらいし、「馬鹿」はちょっと違うかなと。カタカナは、文中によくカタカナを使うので紛らわしいかと思った。あと、「・・・」とか「(笑)」は使わない。

Q. 『凸凹デイズ』『ある日、アヒルバス』で女性の視点（気持ち）がとてもよく書かれていますが、異性の気持ちを知るコツみたいなものがありますか？

A. とくにありません。

Q. ファンレターを出したいのですが、あて先は出版社宛ですか？

FacebookやTwitterに登録して「いいね！」とか言った方がいいでしょうか？

A. SNSについてはおまかせします。ファンレターはどちらにいただいても大丈夫です。

※図書館宛てにメールでも、先生に転送いたしますよ！

Q. 世田谷文学賞と一緒に応募した奥さんは、今は何をされていますか？どんな人ですか？

A. 今は書いていなくて、教員の補助の仕事をしています。基本的に、「義を見てせざるは勇無きなり」の人。「和田誠さんのイラストがいいな」と言ったら、奥さんが和田さんに手紙を書いていたことも。こんなこと話すと怒られちゃうんですけど。

Q. 好きな漫画は？

A. ギャグ漫画が好きです。

Q. タイトルはどんなふうにつけるの？

A. 漫画編集をしていた時も自分でタイトルをつけたりしていたけれど、若い時は気取ったタイトルをつけたがる。今は、できるだけ話の内容に結びつくようなタイトルにしている。

Q. 書くことに詰まったら、どんな気分転換をしていますか？文章を書くことについてアドバイスを。

A. 1時間くらい書くと詰まってくるので、お店を変えたりします。あとは書いている文章を会話文にして、まず自分の言葉に置き換えてみる。ルールを気にしすぎると書けなくなるので、とりあえず自分ルールで好きなように書いてみるとよいのでは。

Q. 『パパは今日、運動会』など、人物相関図はどのように作りますか？

A. 作中の人間関係は、書いていくうちに広がっていく。これはあいつの彼女らしい、みたいに。プロット通りにがちり決めず、楽しく書いている。ただ、どうつなげる？と、後になっておなかが痛くなることもある。

Q. 作品に出したくなるような、好きな町はありますか？

A. あんまり決めていないけれど、「こいつが住むならどういう町がいいか」と、ネットやガイドブックなどで探している。あと、昔行ったことがあるところとか、訪問してみて答えが何となく出ることもある。

Q. 「アヒルバスの歌」とか、いつ頃できるんですか？

A. 書いているうちに、「ここでそろそろ歌いましょうか」となって、歌になる。

Q. 単行本が文庫になったときに追加される一篇は、読者サービス？

A. 最初は読者サービスのつもりだった。でも、主人公のその後の出来事を、2～3年経ったあとでその間何があったか書きたくなる。



時間内に回答しきれなかった質問は、先生が直筆で回答を書いてくれました！

→講演会報告その②へ